

# 創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

## IV／人の創造

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

— 1976年版 —

## 第2部 創造主の造られた世界

### IV 人の創造（創世記二章）

#### エデンの地理学

二章は創造の第六日の出来事のうちいくつか、特に最初の男と女を形造った過程についてもっと詳しく述べています。二章の記述はどの点を調べても一章と相反することなく、むしろ一章を補うものです。二章の用語は一章とは何か異なっていて、二章を書いた人の著者性だけでなく、強調の差をも浮き彫りにしています。二章四節の後半から五章一節までは、おそらく、アダム自身が書いたことでしょう。そして、その結果、創造に関するアダム自身の見解と人類の歴史の最初の出来事がここに示されているのです。

この区分で、最も特色ある用語の違いは、神（エローヒム Elohim）の代わりに主なる神（エホバ・エローヒム Jehovah Elohim）という神の御名が用いられていることです。しかし、四章では、主（エホバ Jehovah）という語が専ら独占的に用いられています。神ということばは四章二五節に出ています。

この区分は前のトリードース（経緯）の部の記事とその後を結びつける節で始まっています。すなわち、二章四節の後半に、神である主という名が初めて出てきており「主なる神が、地と天とを造られた時（日、ヨーム）」とあります。創造のすべての期間を表わすのに、この節で、日（ヨーム）ということばが用いられているので、このことばは、一章で日ということばが記されている他の所と全く同じ意味で受け取る必要のないことをたまたま暗示しているのです。しかし、この結論は必ずしも必要ではありません。前に指摘したようにヘブル語のヨーム（日）は、もし前後関係からみて正しければ、一般に「時」と訳すことができます。前後関係から、この場合はおそらく、時を意味するにとるのが正しいことでしょう。一章の句節で用いられている「ヨーム」は、前後関係から、決して「時」と言う訳を当てはめることはできません。さらに、天と地が初めて創造された時である創造の第一日でも、神が天と地を造り完成されたことを宣言された第七日でも「ヨーム」を文字通り「日」と訳してよいのです。

二章四後半〜六節 主なる神が地と天とを造られた時、地にはまだ野の木もなく、また野の草もはえていなかった。主なる神が地に雨を降らせず、また土を耕す人もなかったからである。しかし地から泉がわきあがって土の全面を潤していた。（協会訳）

ヒトの創造を紹介するに当たって、この記事は、まずそれに先だつ直前の地球の状態を書いています。いろいろな聖書の翻訳や注解から判断して、この所の意味は不確実ですが、完全で、信頼のおける翻訳は次のようなものです。すなわち、「主なる神が地と天を創造された日に、地上にはまだ野の植物もなく、灌木は野に成長していなかった。なぜなら、主なる神は、まだ地上に雨を降らせていなかったし、地を耕す人もいなかったからである。しかし水蒸気が地上から立ち昇り、それが地の全面を潤していた。」

最初の水の循環は現在のそれとは非常に異なっていました。大洪水の時に始まった現在の水の循環は、地球と大陸の空気団の移動と年次的また季節的温度変化をもたらします。水の循環は実に科学的に伝道者の書一章六〜七節、イザヤ書五五章一〇〜一一節、ヨブ記二八章二四〜二六節、ヨブ記三六章二六〜二九節、詩篇三五篇六〜七節、その他の聖書の箇所にとめられています。この現在の水の循環は太陽の熱によって海水が蒸発し、大気の循環により大陸に運ばれ、雨か雪の形で降下し、川を介してまた海に運ばれます。しかし原始の地球では、雨は降りませんでした。創造された初めは、日々の水の供給は、まず第一に局地的水の蒸発と液化によってなされました。後にもっと詳しく出てきますが、泉から流れ出た川がありました。日中と夜間の温度差は、地域的に水の溜っている所からの蒸発と毎晩水蒸気が液化し、露や霧になるのに適度なエネルギーを供給したと思われれます。第三日後半の植物が形成される前に当たる創造の第二日、第三日に、このような準備がなされました。

前章で検討したように、雨が降るといふ現象を妨げたのは、大きな水蒸気の大蓋、すなわち、「大空の上の水」でした。世界中ほぼ同じ温度が維持され、そのために大蓋の下では大きな空気団が移動することは不可能で、降雨にとって必要な条件は満たされていませんでした。二、三人の注解者は、「霧」は実際には川であったと言っています。しかし、そのことばは「もや」または「霧」を意味し、いつもそのように用いられていました。

二章七節 主なる神は土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。

(協会訳)

七節の記事は、創造の第四日、第五日の働きを飛ばして、ヒト自体について述べています。この節は、一章二七節にあるようなヒトの創造についてはなく、身体の形成と身体の活性化について語っています。

神はヒトの身体を造るのに「地のちり」を用いました。この節は大地を構成している最も小さな粒子（現代用語では基本的化学元素、すなわち窒素、酸素、カルシウム等）である地のちりが、ヒトの肉体の基本的構成成分でもあるという思想を伝えているすばらしい句なのです。「第一の人は地から出て土に属する」のです（Iコリ一五・四七）。この事実は、表面的に調べただけでは岩石は人の肉体を構成している物質とは全く異なる物質から成っているように見えますが、それにもかかわらず、現代科学によって、このことは正しいことが証明されているのです。

次に、神は「生命の息を吹き入れられました」。この記事は、初めは「神を擬人化している」ようで、まさに形造った活力のない造形物に、神がほほをつけて息を吹き入れているように描かれています。しかしながら、このような考えは全く不適當です。ヒトの身体は完全なものとして形成され、鼻、肺、その他すべての呼吸器や骨や内臓、その他の付属物を備えていました。生命はありませんでした。それを活性化しなければなりません。呼吸器系が働き始めなければなりません。心臓は血液を送り出し、血液循環を始めなければなりません。そして、すべての代謝機能は各々の働きを始めなければなりません。

しかし、生命は生命のみから来るのです。生ける神のみが有りて有る者で、究極的に生命は神から来なければならぬのです。特に、人の生命と神の生命の無比の関係を強調するために、この聖書のことばは、神御自身が直接生命を分け与え、人に呼吸をさせたと言っているのです。

「生命の息」は動物にも分け与えられています（創七・二一）。「息」は「霊」または「風」（ヘブル語でルアハ）

と同じことばです。動物に対しては、隔てを置いて神の語られたことばによって生命が与えられたのですが、しかしながら、神が、直接生命の息を吹き入れられたのはヒトだけでした。

この時点において、人は「生ける魂」となりました。「魂」はネフェシユで動物に分け与えられ（創一・二四）、意識の原理、精神や感情を指しています。魂は第五日に造られました。ヒトの身体はこれらの動物よりも驚くほど複雑で力量があり、ヒトの魂は神が直接に活力を与えて活性化したもので、動物の魂よりはるかに高度なものでした。

この節は、人類の進化の考えが誤りであることを付随的に示しており、神がヒトに生命の息を与えた時、ヒトは生ける魂となったと告げているのです。しかしながら、もし、ヒトが動物進化の長い過程を経てこの時点に到達したとするならば、ヒトはすでに生ける魂であったことでしょう。コリント人への手紙第一、一五章四五節で、「最初の人アダムは生きたもの（生ける魂）となった」と言われているように、ヒトは動物の祖先からではなく神から魂を直接受けたのであって、アダムは最初のヒトでした。ある人が示唆しているようにアダムに先だつヒトはなかったのです。

二章八〜九節 主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。また主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。（協会訳）

全世界はヒトの支配下に置かれ、それはあらゆる面からすべて良かったのです。しかしながら、最初の人

が家庭を築くために特別な園として特定の場所が準備されました。この所は「歡喜」を意味することばから「エデン」と呼ばれました。エデンの園に神は美しい庭を据えられました。その庭には、すでにおいしい実をつけたあらゆる種類の美しい果樹が成長していました。この植樹は、神が人の身体を直接形造り、生命の息を入られたように、神によって直接なされたので、植物が第三日に初めて芽生えさせられた場合のように、単なる非人格的命命によつたものではありません。

ヒト（アダム＝人）は、エデンの園以外のどこかで造られました。ヒトの家庭のために美しい園を準備しておられるこの神の特別な働きを観察できました。園は東の方に置かれました。当時アダムのいたのはエデンの西側のどこかでした。それから神はアダムをその園の中に置かれました。こうして、創造者に関するアダムの最初の知識は、アダムを愛し、注意深く豊かにアダムのために準備される方という印象であったことでしょう。

八節は、主の完成されたみわざの最初のまとめとも言える節です。そして、九節（実際には九節から一四節まで）は、いわば、振り返って詳細を述べています。園の愛らしい灌木や木々の中に特別大切な二本の美しい木がありました。特に「いのちの木」と呼ばれた一本の木は、園の中央に置かれていました。この木の実は、もし規則的に食べるなら、死ぬべき、あるいは死につつある人でさえ永遠に生きつづけることができるはずでした（創三・二三）。この木が諸国民の健康のために新しいエルサレム（黙二・二）で繁茂するということは意義深いことです。

実際に、ある木の実がヒトの肉体の老化をとどめるほど栄養に富んでいたということは、現在の限られた知識では思いも及ばぬことです。近代科学で最も活発に研究されている分野は、老年学つまり老化現象の研

究です。しかし、まだ老年学者は、老化の過程を科学的にはあまり理解できません。したがって、どのような系の化学物質が老化の過程を止められるか実際には何もわかっていません。神は生命の与え主ですから、直接にも間接にも、神が選ばれる可能性のあるどんな二次的作用を通してでも、生命を与えることがおできになります。この「いのちの木」が、単に何かの象徴にすぎないことを文脈上示していない点や、老化や死の原因について現在科学的には何もわかっていないからといって、この木が文字通りの木ではなかったと考える理由はありません。

同じことが、園のどこかに植えられていた「善悪を知る木」にも当てはまります。この木の実もまた「食べるに良く、目に美しく、……好ましく思われた」（創三・六）のでした。この実が崩壊と死から個人と民族を永遠に守るはずの、実にこまかく均衡のとれた仕組みをくつがえし、血流に入り、さらに遺伝子系にさえ入り込むある種の毒性物質を持っていたかどうかは検討の余地があります。神はすべてを「非常に良かった」（創一・三一）と宣言されたのですから、創造された何物かが有毒であったとはとても考えられません。

木の実自体に何か有害なものがあつたか否かはともかく、人がそれに関する神のことにばに逆らつた瞬間に、その木は確かに悪を「知る」木になったのです。ヒトはすでに善を知っていたので、あとは経験的に悪を知るだけだったはずで、そして、神との交わりの断絶は、その人を神のみから来る生命から、切り離したのです。

第二章一〇〜一四節 また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分かれて四つの川となった。その第一の名はピソンといい、金のあるハビラの全地をめぐるので、その地の金は良く、またそこはブドラ

クと、しまめのうとを産した。第二の川の名はギホンといい、クシの全地をめぐるので、第三の川の名はヒデケルといい、アッスリヤの東を流れるもの。第四の川はユーフラテである。（協会訳）

次に、エデンの地理学と太古の水の供給系統について、より多くの情報が与えられています。エデンの甘美な園は豊かな水を必要としたはずで、おそらく、日々の霧からもたらされたものより多くの水が必要だったでしょう。この水の供給は園の地域を流れている川から来ました。もちろん、これらの水の供給はその付近の地下水面が非常に高く維持され、園にある木の根や他の植物に十分な栄養を供給しつづけたはずで、

川の源はエデンにあつたように言われていますが、おそらく、エデンの園の外はどこかにあつたことでしょう。なぜなら、雨は降らなかつたのですから、川の水はある種の地下の貯水池から、圧力を一定に保っている導管を通して供給されていなければならなかつたはずで、一種の人工の噴水のように圧力をもって押し出されていたと思われまます。しかし、この液圧は、単なる静力学的圧（地下水面より高い位置にある水源から重力の差によって生じた地下水の流れに基づく圧力）ではあり得なかつたはずで、なぜなら、これもまた降雨に依存しているからです。

地表の直下にならず水が貯えられ、おそらく創造の第三日に貯水池の上に重なつた岩の重みで圧縮された時か、または、地下深くにあつた熱源によって熱せられた時に地下の貯水池に圧力が加わる状態が確立した可能性があります。後者の方の可能性が大です。なぜなら、そうでなければ、水が地表に放出されるにつれて徐々に圧力は下がっていったことでしょう。しかし、もし地下の貯水池に水が供給されつづけられ、永続的な熱源があつたならば、表面に湧き出る泉に水が絶えず供給されたことでしょう。

貯水池に入って来た水は、いくつかある海の一つの表面に加わる重力によって岩石の中にある水を通す砂や導管を通して、しみ込んだに違いありません。その下には巨大な温水器とでも言うべきものがありました。おそらく、全世界にわたって地殻の中に同様な地下の導管や空隙があったことでしょう。このように、洪水前の水の循環は地下の水路を通じて海から陸地へと水を運ぶ方法でした。一方、洪水後の水の循環は、大気によってなされています。洪水前の水のたまった地下間隙はノアの洪水の時の隆起によって破壊されましたが、これによる水位の低下を補うためにそれに呼応して水蒸気の天蓋がなくなつて、大気の循環を生じさせ、これによって大陸に雨が降るようになり新しい川の体系が整えられました。

エデンの園にあった川の水の流れは、非常に大きなものであったに違いありません。園を横切った後四つに分かれ、その各々は大きな長い川となりました。各々の川は最後には一つまたはもっと多くの洪水前の海に達し、水の循環を完成していたに違いありません。

四つの川はピシオン、ギホン、ヒデケルとユーフラテスと名づけられました。アッシリアの記録によると、チグリス川はヒデケルとも呼ばれています。他の二つの名は今日わかつている川でそれに相当するものではありません。ある学者はギホンはナイル川で、ピシオンはガンジス川かインダス川だと示唆しています。これら後の二者は、記録されている地理学的特徴から同定することは不可能ですが、現在は存在していない洪水前の川を指すと見るのが妥当です。

ピシオンはハビラの全地を巡っていたし、ギホンはエチオピア（クシュ）の地を巡っていたと記されています。ハビラの地は地理的に不明確ですが、クシュは、後に聖書に出てくるアラビア地方と現在のエチオピアの地に関連しています。いずれの場合にも、その地を潤している川は確かにありません。さらに、チグリス（ヒデケル）は、アッシリアの東方に流れてゆくと書かれていますが、歴史上知られているチグリス川はアッシリアの西側にありました。

概して、これらの節に書かれている地理学上の地点は明らかに現在ありませんし、洪水後存在したこともありません。ここに記録されている川や地域は洪水前の地理学上の特徴で、この部分の原著者であるアダムがよく知っていたものでした。これらの地域は全部壊滅し、地形や地理は「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びた」（Ⅱペテ三・六）時、完全に変わってしまいました。

このことは、洪水後エチオピア、アッシリア、チグリス、ユーフラテスとされている名は元来、洪水前にあった名がつけられたことを意味します。何らかの形で後で思い出されたこれら以前の名の記憶に基づいて、洪水で生き残った人々が覚えていた名を、洪水後の世界の人々または場所に付けたことでしょう。現在のチグリス、ユーフラテス川流域にエデンの園を同定しようとして失敗した人々は、大洪水によって洪水前の川が完全になくなつて、現在の世界には、それに相当する物理的関係がないことを認識し得なかった人々です。もちろん、エデンの園もノアの洪水で滅ぼされたので、現在の地理学でその位置を示すことは不可能です。

太古のハビラの地が金や宝石（民一・七でマナと呼ばれている不思議な物質に似た）に富んだ地と言われているのは大切です。後にハビラの名は、まずハムの子孫であるクシュの子（創一〇・七）とセムの子孫であるヨクタンの子（創一〇・二九）に与えられました。明らかにこれら二人の息子たちは、洪水前のハビラ（砂の地を意味すると信じられていた名）にちなんで名づけられました。洪水前の豊かな原始の大地は、ノアの息子たちに大きな印象を与えたと思われれます。この記事は、過去形（園に言及している一〇節）と、現在形（川

とその流域を記述している（一―一四節）で書かれているので、アダムがこの記事を書いた時、エデンの園は何らかの理由ですでに取り除かれていたことを暗示しているようです。

## 道徳的選択

アダムは神のかたちに創造され、自然界と生物界を問わず、すべての被造物に対する支配権が与えられることになっていました。天使でさえ、人類とその運命に関係ある奉仕のために創造されたのです。その上さらに、アダムが生活するように定められていた世界、そして、特に彼の総司令部となったかもしれないあの美しいエデンの園は、あらゆる面で完全な環境でした。いかなる肉体的、知的、霊的必要性も、彼にかなえられないものはなかったでしょう。

しかし、「……すべて、多く与えられた者は多く求められ……」（ルカ二・四八）なのです。ここで、人類創造の目的に関する問題が提起されるに違いありません。三位一体の神は、人類がいなくても永遠に存在して来ました。すなわち、なぜ神は人類と人類の住むべき時空世界を創造しようとされたのでしょうか。

このような問題に、神の啓示を離れて答えることは不可能です。私たち自身がこの創造の一部であり、したがって、私たちは創造主をさばく立場にはありません。神が人間を創造された事実そのものが、神がそうされた理由があったという証拠として十分です。神のなさることは、理にならなっているに違いありません。「形

造られた者が形造った者に対して『あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。』と言えるでしょうか」（ロマ九・二〇）。

この主題について私たちに神の与えた啓示は、少なくとも、神が愛の神（一ヨハ四・一六―一九）であり、神がすべての人々を愛していることを請け合っているのです。人間は神のみこころと喜びのゆえに（黙四・一一）創造されました。そして、神は人間のために彼の恵みの卓越した豊かさを、来るべき世々を通して証明しようとされたのです（エペ二・七）。

こういうわけで、男と女を創造するに当たって、愛という神の本性が神の目的の中心であったことは疑いのない所です。神御自身の本性という神秘的な深みにおいて、神が御自身の愛を注ぎ得る、神御自身のうちにある人格とは別の霊的人格を求める思いがあったと思われまます。

しかし、愛とはある面で相補的な関係です。人は決して生命のないものを真に愛することはできません。しかし、愛ということばがしばしば不用意に用いられているようです。さらに、報いられない愛は人間生活における最大の悲劇の一つです。そのあらゆる完全さにおいて表現されるべき愛にとっては、互いに愛し合う相互の愛が存在しなければなりません。そして、完全な創造者は不完全な愛の関係では到底満足できなかつたでしょう。

それゆえ、神が御自分の愛を注ぐ目的で人を創造されたら、神の目的には人間同士が互いに愛し合う愛も含まれていたに違いありません。しかし愛はその性質上、自由意志に基づくものでなければなりません。ロボットは製作者を愛せません。もし、人々が真に神を愛するなら、（人々に対する神の愛に応えて）男も女も自分の意志で神を愛する選択ができなければなりません。自由意志によらない愛というものはそもそも矛盾であつ

て、それは愛ではありません。

一方、もしアダムが自分で主導権を持って神を愛する自由を持っていたなら、神を愛さない自由も明らかに持っていたはずです。もし、アダムが正しい道徳的選択をすることができたなら、アダムは必然的に間違つた道徳的選択をすることもできたことでしょう。神が、神御自身にかたどつて道徳的に自由な立場にある霊的存在を創造するなら、明らかに、その霊的存在が神と神の愛に反発する危険を犯さなければなりません。彼らに自由な判断を許すためには保護観察の期間を見なければなりません。

二章一五〜一七節 主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。 (協会訳)

ある意味で、アダムの経験は他のすべての人の経験に似ています。私たち一人一人は神の執事として被造物全体、特にすべての人に対して神からの任務が委ねられています。私たちはみな、しばらくは罪やとがの自覚なしに生活します。すなわち、しばらくの執行猶予期間があります。そして、最終的に、私たちはみなアダムのように熟慮した上で神のことに逆らつた罪人として有罪となります。

一方、アダムの経験は、このように他のすべての人が経験することの比喩として考えることができます。これは自由主義者がよく示唆していますが、それだけではありません。アダムは実に最初の人でしたし、彼の経験は、文字通り聖書に記述されているように起こりました。もちろん、アダムとエバだけが誕生、もつ

と正確に言えば創造によって地上に生を受けました。そして、彼だけが罪の性質がなく、完全に罪のない状態で世に生まれました。

「保護観察」の期間をアダムに説明する前に、神はまずアダムに、園にある家庭を守る特別の義務を与えました。神がエバを造られた後、神が彼ら二人に被造物すべてを支配するようにとつてもつと幅広い命令を与えたのは、明らかにもつと後のことです (創一・二八、二九)。この時点では、エデンの園の土地を耕し、仕上げ、番をすることだけを教えられました。有害な雑草はまだなかったとはいえ、土地は非常に肥沃で、植物が非常にたくさん繁茂したので、その成長に当たつて溝を掘つたり間引いたりする必要がありました。

神がお造りになつた完全な世でさえ、人の幸福のために労働が必要であつたことは注目に値します。理想的な世界は、怠惰と浮かれた世界ではなく、真面目な活動と奉仕の世界です。罪や呪いが完全に取り除かれた後、やがて来る新しい地においてさえ、聖書は「そのしもべたちは神に仕えた」(黙二一・三)と述べています。アダムは園の番をするように告げられました。このことは実際には、園を守ることを意味します。外敵が一つもなかったので、外敵から園を守るといふ考えはなく、むしろ、園を美しく秩序正しく保ちながら、全体として調和のとれた関係で、園のあらゆる点に気を配る愛をもって、園を管理することであつたと考えられます。

人が地上を支配するという考えが地球資源の乱開発を導いたという後世のある進化論的生態学者のところが、だては明らかに不合理です。神の命令は生態系を保全することであつて、破壊することではありません。そして、聖書を信じ、理解している人々は、常にこの命令を環境保全のためと受け取っていました。

それから、神はアダムの注意を、神がアダムの必要を豊かに備えておられることに向けました。アダムは

園のどの木からもほしだけ取って食べる自由がありました。また、アダムは彼が欲する草をどれでも食べることができました（創一・二九）。「生命の木」の実を食べてはいけないという制限すらなかったのです。ただ一つ小さな制約がありました。すなわち、それは神に対する人の愛を試すための制約で、もし人が欲するなら神のことにそむく機会を手にすることができたのです。

もちろん、真の愛は信頼に基づいており、人のために神がしてくださったすべてのこと——生命を与え、美しい家庭、多くの種類の豊富な食物とアダムが必要であったり欲したりするものすべて——のゆえに、神に大いに感謝するのは当然で、しかも当り前のはずです。それゆえに、アダムの神に対する愛は、あらゆる点で喜んで神のみこころに従うようにさせたはずです。このように多くの神の愛の証拠に囲まれていたからには、アダムは、神から来た指示は神の愛の証拠と同じであり、したがって、喜んでそれに従うべきだと考えて当然だったことでしょう。

こういうわけで、アダムに、また少し後でエバに、神によって設けられた制約は、この目的にとつて風変わりではあるが、適切なものでした。恐れからではなく愛に基づいてあらゆる面で神の命令を全うする理由が人であり、従わない理由は何もありませんでした。もし人が従わないなら、人には何の言い訳も有り得ないことでしょう。それなのに、人は選択の自由を持っていました。それゆえ、神の前に真に「道徳的に自由な行為者」でした。これは創造者に対する人の態度を試験するのに考えられる最も単純なものでした。自分に対してこのような愛を示された方を愛するゆえに、アダムは神を「信頼して従おう」としたのでしょうか。それとも、アダムは神の善意を疑い、パラダイスに豊かに準備されたものうち、たった一つの果実を食べるにはいけないという本当に些細な神の制約のことにすら反発し、従おうとしないで神の善意を疑い神の統

制に腹を立てたのでしょうか。

唯一の禁断の木は、善悪の知識の木でした。それを取って食べる者にこのような知識を分け与える何らかの魔術的物質がその果実にあったことを示唆してはいません。また、昔や現代の多くの注解者が何らかの理由で説明してきたように、この節は性交を婉曲に表現しようとする意図して書かれたものでもありません。

神が、この木の実を食べることを特別に禁じられたにもかかわらず、その後で、この木の実を食べたのです。すると、本当に悪いことは何かという知識が人に与えられたのです。結局、「悪」とは神のみこころの拒絶であると明白に定義できるのです。したがって、神のみこころに対する不従順は悪に荷担することであり、悪を経験的に知ることです。

人はすでに「善」の知識を持っていました。人が見、経験したすべては善でした。神のことは拒絶することは、必然的に人に悪の知識を伝達することになるのです。それゆえ、禁じられた木の実にあずかることは、最も強烈に現実的方法で善悪の違いと共に善悪の知識を確実にアダムに与えたことでしょうか。

アダムは彼の愛の表現として、ただ、神に従うべきだったのです。しかし、恵み深い神は、不従順の必然的結果をはつきりと警告し、さらに、アダムに従うべき動機を提供しています。神の愛を拒否することは、当然、人と神との間に隔ての壁をもたらします。そして、そのために神が人を創造された神と人とのすばらしい交わりを破壊します。神は生命の源そのものですから、まことの生命は、神の生命との霊的交わりによってのみ見いだされます。それゆえ、生命の反対である死の本質は、神との交わりの反対で、神との断絶です。「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

最初の警告は、疑いもなく霊的死の警告、または神からの断絶の警告です。しかし、これはまた肉体的な

死をも伴います。なぜなら、神は霊的生命と肉体の生命の源だからです。文字通りに取ると、警告は、「死につつある、あなたは死ぬ」と読むことができます。アダムが神に従わなかったその時、崩壊と死の原理がアダムの身体に働き始めたはずで、そして、ついに崩壊と死の原理が、生まれながらの代謝の過程に打ち勝つて、アダムは肉体が形造られた地のちりに逆戻りするはずで、たとえ、アダムが生物学的に九百年以上機能しつづけたとしても、アダムが神のことにばに反逆し、従わなかったその日に霊的にまたは原則的に肉体も死にました。そして、同じ型の行為がアダムの日から今日に至るまで、まさにすべての罪の基本なのです。

## ヒトと動物

ヒトは共通の祖先や進化論的つながりによって、他のすべての動物と関連のある単なる動物に過ぎないのでしょうか。このことを聖書がどう教えているのか、少しでも問題を感じていたら、二章後半の学びはこのような考えを葬り去ります。最初の男と女は、神の唯一の特別な創造の結果であって、動物と比べてその似ている点が目立つのではなく、むしろ動物と比べて、その違いがはっきりと目立つのです。

ヒトは類人猿に似た祖先から進化して来たという一般に行きわたっている信念を、聖書が拒否しているばかりでなく、すべての科学上の事実も拒否しているのです。ダーウィン時代の「ミッシングリンク」は、今日もなお欠けています。真のヒトに属する多くの化石と、真の類人猿の化石が多数人類学者や古生物学者に

よって発掘されてきました。しかし、現在まで生きている動物でも、化石になった遺骸を調べても、ヒトと類人猿の間の、またはヒトと類人猿に似た想像上の祖先との間の中間型もいまだかつて見いだされたことがないので、この中間型の候補者として最近考えられた最もよい例は、いわゆるアウストラロピテクスの化石でした。しかし、人類学者リチャード・リーキーによると、最近の化石の証拠は、アウストラロピテクスは手が長く、足が短く、こぶしで歩いていたことを示唆しているとのことです。こういうわけで、アウストラロピテクスは絶滅した類人猿に過ぎないと考えるのが最も妥当と言えます。それは類人猿の大きさの脳容積（約五〇〇CC）をもち、現在の類人猿より小さく、いくらかヒトに似た外観の歯をもっていたのは、特別な食物を食べていたからに過ぎません。

さらに、リーキー博士とヨハンセンおよびその共同研究者による最近の発見は、真のヒト（ヒトと全く同じ頭蓋、直立姿勢など）は類人猿（類人猿に似た生物）とヒトとの移行型として以前に候補として挙げられたアウストラロピテクス、直立猿人やその他のすべてと、少なくとも同じくらい早期に存在していたことを立証しました。実際の化石の証拠が示す範囲では、聖書が教えている通りにヒトは常にヒトであり、類人猿は常に類人猿でした。

二章一八節 また主なる神は言われた、「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」（協会訳）

創造の第六日の最後に、神は、お造りになったすべてが「はなはだ良い」（創一・三二）と言われました。しかし、

最後の創造のみわざは女の創造でした。それゆえ、この最後の仕事が終わらないうちは、創造はなお未完成でした。とりわけ、男は女なしには不完全で、これはよくないことでした（このことは悪であったという意味ではなく、未完成で、それゆえ不完全であったことを意味していたに過ぎません）。それゆえ、神御自身が「男がひとりでいるのはよくない」と言われたのです。

すべての動物は雄と雌とに造られ（創六・一九）、種類に従ってその子孫を生み、地を満たす（創一・二二、二四）ように指示されていました。神の全被造物中、ヒトだけがこのような連れ合いがありませんでした。それゆえ、神は「男にふさわしい助け手」造りに着手しました。神は御自身で男の身体を造られたように女の身体をも御自身で造ることに取り掛りました。さらに神は男も女も決して忘れることのできない象徴的意味に富んだ、すばらしい方法でこのことをなされたのです。

二章一九～二〇節　そして主なる神は野のすべての獣と、空のすべての鳥とを土で造り、人のところへ連れてきて、彼がそれにどんな名をつけるかを見られた。人がすべて生き物に与える名は、その名となるのであった。それで人は、すべての家畜と、空の鳥と、野のすべての獣とに名をつけたが、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。（協会訳）

しかし、まず第一に、神はアダムが動物たちを一匹一匹親しく観察して、多くの動物と親しくなるように準備しました。このことには二重の目的があつたようです。それはアダムに、動物界に関する彼の責任を知らせることと（創一・二八）、人は動物界に支配権を行使するけれども、動物の仲間にはなり得ないことをアダムに心にたたき込むことです。動物の中には、一匹としてアダムの必要にかなう資格のある助け手はいませんでした。でも、アダムはこのような助け手なしでは不完全でした。そこで、このためには神がもう一つ創造のみわざをなす必要があつたのです。

多くの人々は一九節の動物の創造の記事と一章の動物創造の記事との間に矛盾が見いだされると主張して一九節につまらないけちをつけます。一章では鳥は第五日、陸生動物は第六日にアダムの創造に先だつて造られたのです。しかしながら、二章のこの節では、これらの動物はアダムの創造後、この時に造られたと言っているように思われます。

しかしながら、このような解釈は前後関係から出て来ません。実際に、もしそうならまず第一にたくさん動物を造つてアダムの助け手を見いだそうとしたが、これに失敗した時ついに女を造る決断をしたということになり、アダムの助け手を見いだそうとして失敗した責任を神に負わせることになります。神は「人に適した助け手」を造る目的を表現しただけでした。したがって、神はまず動物を造つてこの目的の実行に着手したと考えるのはばかげたことです。

実際、これらの動物はすべて一章で述べられているようにすでに存在していました。このすべての事は一章にすでに記録されていました。したがって二章では年代順の記録すべてを書き直す必要はありません。また実際に動物がヒトに出会う時まで動物について述べる必要さえありませんでした。なぜなら、その記事は第六日の後半で詳細に取り扱われているからです。

話がこの点までくると、一九節は単に神は動物を形造られた方で、アダムの身体を地のちりから形成されたように動物の身体をも地のちりから形成された方であるという事実に向けさせます。しかしながら、

肉体の構成成分はヒトとけもの身体では同じでしたが、アダムが動物を実際に調べた時すぐにわかったように、動物とアダムの間に真の交わりの可能性はありませんでした。アダムは「神のかたち」に造られたので、彼に似た性質をもった存在を必要としていたのでした。

事実、一九節を「また、地から、主なる神はあらゆる野のけもの、あらゆる空の鳥を形造っておられた。そうして、アダムが彼らを何と呼ぶかを見るためにアダムの所に連れて来られた」と翻訳してもまったく筋の通った訳なのです。ヘブル語の接続詞ワウは「そして」と訳せると同時に「また」とも訳せるのです。さらに欽定訳聖書で「形造った」（ヘブル語でヤーツアル）という語は文脈上「すでに形造ってあった」と何の問題もなく翻訳することができます。いずれにせよ、この節の明白な意図は、すでに存在していたある種の動物が、この時点でアダムに見せるためにつれて来られたことを告げているのです。真実であれ、外見上であれ、一章にある創造の順序に矛盾するものではありません。

実際、アダムの所に連れて来られたのは、最も近くについて論理的にも人の仲間になりうる候補者の動物たちだけでした。これらは空の鳥、家畜（二〇節—おそらく飼いならすことのできる動物たち）と人の住居近くに住んでいる明らかに小さな野生の動物たちでした。これらには海の魚、はうもの、人の住居や耕地からかなり離れた所に住んでいる野生の動物たち（創一・二四）は入っていませんでした。

これらすべての動物はエデンの園に近づくことはできたかも知れませんが、実際に園に住んでいたとは思われません。それゆえ、神は何らかの方法でアダムの所に彼らを導かなければなりません。こうして、主人と動物たちは恐らくお互いに知り合ったことでしょう。私たちはアダムの前にどれだけの動物が姿を見せたかを確実に知る方法はありませんが、せいぜい二〜三時間以内に審査できる程度であったことは明らか

です。アダムは論理的に見て、毎分十種類位は審査し名をつけることができたでしょう。したがって、五時間もあれば、三千種くらいは判別できたはずで、明らかに、これだけあれば、この場合の必要を満たすには十分であったと思われる。

動物たちが目の前を通っていく時、アダムはすばやく評価し適切な名をつけていきました。彼が用いた言語は何か、また、動物たちの名を選んだ基礎は何であったかは知るよしもありません。しかし、全知の神がヒトを完全な状態にお造りになったばかりであったことから当然期待できるように、アダムは知性の優れたすばやい識別力をもった存在であったことを示しています。これらのことから、これらの名を考え直したり後で変更する必要はなかったと思われる。「アダムがすべての生き物に与える名は、その名となるのであった」。

動物たちが、雌雄対をなしてアダムの前を次々と通過するに連れて、アダムは知的かつ霊的な面だけでなく、自分と同じものはいないこと、すなわち「孤独性」についても深い印象を受けずにはいられませんでした。各々の動物はつれあいを持っていましたが「アダムにはふさわしい助け手が、見つからなかった」のです。

ヒトと動物の間にはどの点をとっても似たところは明らかなでした。アダムのようなものは全くなく、アダムと仲間になり交友関係を持ち得るように備えられた動物は一つもありませんでした。アダムが彼らから最近進化してきたことを示唆するものはどこにも全く見当たりませんでした。もし進化したのが真実であれば、アダムの身体はなお本質的には類人猿の身体であったか、または、アダムの直接の祖先である「類人ホミニド」の形態をとっていたことでしょう。アダムが両親または兄弟のどちらとも共通のものを何も持っていないのは変に思われます。この点で、他のいろいろな点と同様に、人類進化の考えは聖書の明白な記述

に對立し矛盾するのです。

すべての動物のどれをとっても「彼に似た助け手」を見いだせませんでした。すべての生物の中で彼だけが本当に孤独でした。そして、それはよいことではありませんでした。神の創造を「完了した」、そして「はなはだ良かった」と宣言する前に、この非常に大切な欠陥を除かなければなりません。神はアダムを完全に補い、神のわざを完成するためにアダムに似ているが異なるアダムの助け手であり仲間である者を準備したのです。

## 彼の肉の肉

エバの創造と形成の記事は、有神進化論者にとって絶望的なものです。もし、だれかがアダムが地のちりから形造られたと聖書が言っている本当の意味は、ヒトは類人猿に似た祖先から進化したことを指すと信じ込むことができたとしても、エバの起源の独特な方法に関する記事を進化論に合わせて説明することは、全く不可能に思われます。

進化論者にとってさらに都合の悪いことは、新約聖書がはっきりとこの記事が歴史的に正しいことを保証していることです。「アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです」(イテモ二・二三)。「なぜなら、男は女をもとにして造られたのではなくて、女が男をもとにして造られたの」(イコリ一・八)です。アダム以外のすべての男は女から生まれましたが、最初の女は男から造られたのでした。

神が人のために打ち建てた最初の制度が結婚の制度であったということは大切です。人が一人ではどうすることもできない長い幼年時代には、両親は子どもを注意深く保護し訓練しなければなりません。神は知恵を働かせて、夫と妻の相互の愛と尊敬をもとに建て上げられる家庭が、人類の権威と教育の基本的単位となるように制定されました。

家庭における父親の権威から、人口が増えるにつれて家長制、部族制に発展し、さらに後にはもつと綿密な政治体系へと進展しました。同様に、両親の子どもに対する教育や訓練の基本的活動から、ついに学校やその他の教育制度が確立しました。霊的領域における教育や権威の機能を持っている教会も、また多くの点で同様に家庭を模倣しています。

神が最初の女を造られた方法は、確かに私たちが通常期待しているものではありません。神がアダムを地の構成成分から直接造られたと同様の方法で、女の肉体をも造られたと考えがちです。しかし、その代わりに、神は女をアダムのからだから「造られ」ました。アダムの生命は女の生命ともなりました。

神はこのような特別な方法でエバを「作り上げるのに」ふさわしい理由を持ち合わせていたに違いありません。新約聖書から、私たちはこの象徴的行為によって描写されていることは、確かに偉大な霊的真理であったと推論します。さらにここから直接導き出される重大な真理は、アダムとエバは本当に「一つの肉」であり、したがってアダムとエバは一体として、心を一つにして創造者に仕えるべきだということです。

二章二一〜二三節　そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。(協

## 会訳

アダムに動物たちを見せ終わってから、おそらく神はしようとしておられたことをアダムに説明されたこととでしょう。(アダムは後で、神がどのようにしてエバをお造りになったかをはっきりと理解していたように思われます。)とにかく、神はアダムを深く眠らせ、アダムが眠っている間に驚くべき外科手術を行いました。この眠りで苦痛(それまで、この世で苦痛や苦難についての知識はなかった)を取り除く必要がなかったため、この行為には何らかの深い霊的象徴があったに違いありません。まだこの世に死は存在しなかったのですが、その時アダムの生命を分けた花嫁を得るために、アダムはあたかも死んでいるかのようでした。

カルバリの十字架以後、クリスチャンは、神がここに「世の初めから殺されるべく定められた」(黙一三・八英訳)一人の人について告げている永遠の福音(黙一四・六)の最初の宣言を見逃すことはなくなりませんでした。しかし、この時点でアダム自身はこのことをおそらく理解していなかったことでしょう。少なくともアダムは、神の助けがなければ、まさに生命が終わると思われる状態から、新しい生命の形成とそれとの完全な交わりが始まったとの印象をいつも持ち続けていたことでしょう。

「あばら骨」という語はまずい訳のようです。ヘブル語 *tsela* (ツェラー) は旧約聖書に三十五回も出ていて、そのうち「あばら骨」と訳されているのはただこの箇所だけです。大抵の場合少なくとも二十回は、ただ「脇」を意味しています。このことは、明らかにアダムの頭(アダムより優れていることを示す)でもなく、アダムの足(アダムよりも劣ることを示す)でもなく、対等で仲間であることを示すアダムの脇から造られたとの考えを強調しています。この節は、おそらく、次のように訳すべきものだったでしょう。すなわち、「そ

して、彼のわきの一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、男から取ったわきをひとりの女に造り上げ、その女を男のところと連れて来られた」。

ある人々が、子どもじみた非科学的な神話とみなしていたものの代わりに、この文は実に美しく現実的で意義深いものです。非科学的な神話とする人は、もし男のあばら骨から女を造られたとしたら、現在の男のあばら骨は女のあばら骨より一本少ないはずなのに、実際は少なくとも指摘して神話とみなすのですが、仮に女のもとが実際のあばら骨であったとしても、このような「獲得形質」は決して遺伝しないという事実を知らないで、それこそ非科学的な話なのです。

では、どのような意味で主はアダムのわきの一つを取られたのでしょうか。開かれたわきから取り出された「脇」は、血と共に肉や骨がついています。アダムは後に、「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉」と言うことができました。

生理学的に、人のからだの中で、「骨」も「肉」も共に神がデザインされた血液と、血液を押し出し循環させるすばらしい網の目構造によって、養われていることは大切です。血液は身体のすべての物質と機能を維持するために人が取り込んだ空気にある酸素や食物にある他の化学物質を運搬します。事実、「肉の生命」(文字通りには肉の『魂』)は血にある」(創九・四、レビ一七・一一)のです。

もちろん、これらの考えは私たちに、死の「深い眠り」に入られた時、カルバリ山上でわきを刺し通された方のことをすぐに思い起こさせます。その方の骨は折られませんでしたでしたが、その方のわき腹からは「血と水が出て来た」(ヨハ一九・三四～三六)のです。アダムの「生命」(骨と肉を養っている血液)から、神はアダムの花嫁エバを造られました。同じようにして、「キリストの花嫁」(IIコリ一・二)である私たちは、イ

エスの血（ヨハ六・五四～五六）によって生命を受けました。それによって、私たちは肉と骨から成る「キリストのからだである教会の肢体」となりました（エペ五・三〇）。

エバはこのように「地を満たし」「地を従わせよ」という神の命令を遂行するアダムと共に働くために、アダムのわきから造られました。エバはアダムと同じ「肉」（すなわち身体）と「生命」（すなわち魂）、を持っていただけでなく、エバはまたアダムのように永遠の「霊」を持っていました。しかし、霊（もつとよい表現を用いると「神のかたち」）は、エバの肉体の生命とは異なり、アダムを経た間接的なものではなく、神からの直接のものでした。このことは一章二七節の「神はこのように人をご自身のかたちに創造された……、男と女とに彼らを創造された」とあることからわかります。直接神によって創造された「神のかたち」は、男と女と、に与えられました。しかし、「主と交われば」、たとえこの世の次元においてさえ、男と女は「一つの霊」となるのです（Iコリ六・一七）。

同様に、アダムとエバのすべての子孫は、遺伝的伝達によって、肉体的、精神的性質を受け継ぎますが、各自が持っている永遠の霊は直接神から来るのです。こうして、人は各自、神との個人的な交わりができるのです。「人の霊をその中に造られた方」（ゼカ一二・一）は神です。そして、人の肉体がちりに帰る時、人の霊は各々神の下に「帰ります」（伝一二・七）。

アダムが深い眠りから目覚めた時、そして、神がエバの創造を完了された時、神は、その時から男と共にいるために「エバをアダムの所に連れて来られ」ました。同じように、神は、あたかも「からだを建て上げる」（エペ四・二一～一六）かのように、今キリストのための花嫁を形作っています（使一五・一四）。この働きが終わった時、神はキリストの所に花嫁を連れて行き、キリストは花嫁と会います。そして花嫁はいつも主と共にいることとなります（ヨハ一四・二三、Iテサ四・一六、一七、黙一九・七～九、一二・一～四）。

二章二三～二四節 そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。（協会訳）

神がエバをアダムのところに連れて行ったとき、アダムは「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これは男（ヘブル語 *ish* イーシュ）から取ったものだから、これを女（ヘブル語 *isha* イシャー）と名づけよう」と言いました。初期のヘブル語 *adam*（アダム）は、もっぱら「男」を指すのに用いられて来ました。

それから、結婚の特徴をはっきりさせている不朽の価値を持つ文が続きます。「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」子どもは彼らが自分の家庭を築き上げる準備ができるまで、両親に従うべきです。その時が来ると、花婿、花嫁は両親のもとを去り、その日から先は「一体」となるのです。

個々の家庭が完全に生涯続くことは非常に大切です。それは、結婚を死に至るまで永続させようと、神が初めから明らかにしておられるからです。もちろん、人の他のすべての活動と同様に結婚に関して「神は人を正しい者に造られたが、人は多くの理屈を捜し求めた」（伝七・二九）ことも事実です。一夫多妻、内縁関係（同棲）、一妻多夫、安易な離婚、姦淫乱交や結婚の契約をゆがめるなどの現象が、多くの文化に浸透しています。

しかし、「初めからそうだったのではありません」(マタ一九・八)と主イエスが言われたことばの通りでした。永続的な一夫一婦制が最も理想的で好ましい家庭のひな型と考えられてきた証拠を民族学者や人類学者たちが、どこでも、どの時代でも、見いだしていることは非常に大切です。本当の幸福や本当の願いの実現、神の目的の真の成就是、必然的に「人は妻と結び合い、一体となるのである」という神の最初の命令に従うことにあるのです。

罪が世に入ったため、神がこの理想を厳しく強いるのは、必ずしも適当でなくなっていました。例えば、アブラハム、ヤコブ、ダビデのように、神が一夫多妻性を承認(少なくとも許可)し、それを行なう者を祝福さえしているように思われる時があります。同様に、モーセの律法は離婚を許しましたし、ある場合には、神は離婚を命じさせました(エズ一〇・一一)。

「しかし、初めからそうではなかった。」福音と新約聖書の光に照らして、主のみこころをすべてにわたって行なおうとしている真のクリスチャンは、もちろん、地上におけるすべての人間関係のうち、最も基本的で重要な点でみこころに従いたいでしょう。

人類の繁殖と青年の訓練の基本的媒体としてのこの一夫一婦制の結婚、家庭と家族の制度は、このような習慣が、いかにして、また何故に起こってきたかを考える人があまりないほどに、人類に共通しているのです。一夫一婦制は、他の霊長類や哺乳類では行なわれていないので、進化の結果とは言えません。夫婦の交友関係と愛、性の結合と妊娠、胎児の成長と出産、子どもから大人への成長のようすばらしい準備、これらすべては、神の力と知恵とが、計算することのできないほど複雑ですばらしいことの証拠です。それはちょうどパウロが、「この奥義は大きい」(エペ五・三二)と述べている通りです。

本当のクリスチャン・ホームの祝福と喜びはこのような家庭を得るために費やされるあらゆる学びと祈りと努力に値します。さらに神は、この関係をクリストと教会の関係を示す絵またはひな型に選んでおられます。このことは、聖書のエペソ人への手紙五章二二～二三節で示されています。夫は、「クリストが教会を愛していのちをささげた」ように、犠牲的、防衛的で、供給しつつ、完全にさせる愛をもって妻を愛さなければなりません。そのお返しに、妻は教会があらゆる点でクリストを尊び従うように夫を尊敬して従うべきです。

実際に、神が男と女を創造された時、神によって定められた家族単位は、それ自体、天にある家族の美しい型でもありました。パウロは、私たちの主イエス・クリストの父に関して、「天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父」なる神(エペ三・一五)と呼んでいます。少なくとも、神を崇め、みことばを信じている人々からなる私たち人間の家族における夫婦や親子の愛は何らかの意味で、父、子、聖霊の永遠の愛とクリストが教会のために贖いとなられた愛を示しています。

ちなみに、私たちは、主イエス・クリストが結婚について、創世記の初めの記事に基づいて教えておられることに注意しましょう(マタ一九・三～九、マコ一〇・二～一二)。主は明らかにこの記事を比喩的にでなく歴史的なものとみなしていました。さらに、主は創世記の最初の一章、二章の両方を同じ文脈の中に引用し用いています。主イエスは「あなたは読んだことがないのですか」と、一章二七節を引用して「創造者は初めから人を男と女とに造られ」と言われました。さらに、二章二三節と二四節から引用して「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」と言われました。主イエスは、あたかもこれら二つの章が互いに「矛盾する」と称する近代高等批評の結果を知らなかったかのようにです。これは二つの記事が矛盾するとみなし、アダムとエバは比喩に過ぎないとみなしている近代の神学者(このような人

は今日たくさんおり、福音的なグループの中にもいます）は、使徒パウロや主イエスの靈感されたあかしにそむいているのです。これは簡単な問題ではありません。

二章二五節 そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

こうして、最初の結婚は完成し、最初の家庭ができ上がりました。アダムとエバは、肉体的に、精神的に、霊的にお互いの他の特質を補い合って、ほんとうに「一つの肉」でした。この理想的家庭に罪が入る前、聖書は「彼らは裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」と言っています。

もちろん、彼ら以外に彼らを困惑させる人はだれもなく、彼らだけででした。そして、彼らの肉体上の違いは、神の目的に合わせて神によって創造されていきましたので、彼らはお互いに不自然には思いませんでした。恥とか、困惑する思いは、このような環境では全く不自然だったことでしょう。

さらに、もっと大切なことは、彼らは罪や道徳的罪責の自覚を持たず、なお罪のない者でした。神は彼らに「ふえよ。……満ちよ」と命じられました。したがって、彼らが結婚によって肉体的に一つになることに罪の意識が生じる理由はありませんでした。しかし後に、神のことにばに対する反逆の罪が人の生命の泉を毒し、彼ら自身だけでなくすべての子孫、生まれて来るすべての生命をも毒してしまったことを知るようになり、また。この意識がまもなく生殖器官に関して痛いほど意識するようになり、それで、彼らは恥じるようになりました。しかし、これは後に起こったことでした。初めは罪がなく、したがって恥じることもありませんでした。